

フィンランドにおける

口承文芸研究の過去と現在

ラウリ・ホンコ

竹原 威滋・記

一 研究の目的とジャンル変遷史

昔話をはじめとする口承文芸に対する関心は、本格的な民俗学的研究が始まるよりもずっと以前からあった。この関心が古いだけあって、口承文芸やその性格に関する理解はかなり素朴で未分化なものであった。しかも、口承伝承において語られるさまざまな事物には、なるほど関心が強かったが、そのようなさまざまな情報を伝えるてくれる口承伝承そのものにはあまり興味が持たれなかった。とりわけ、神学者、歴史学者、言語学者、文学研究者たちは、それぞれ、自分の方法で、自分の目的にそって口承文芸を利用した。従って、それぞれの時代特有の研究態度や実用上の必要性が、口承文芸の伝えるところのものにどんな意味とどんな証言力を与えるかを、決定せざるをえなかったのである。

さて、民俗学的な資料の「学術的資料として耐えうるかどうか

の」本格的な原典批判は、民間伝承の包括的な知識と口承文芸のさまざまなジャンルに対する明確な理解を必要とするが、その原典批評の、最初の兆^{きざし}は、フィンランドにおいては十八世紀の終り頃の、「大学の創始者」ポルターンの時代にさかのぼる。この啓蒙主義時代の研究に続いて、十九世紀の国家的ロマン主義の時代には、ロンルートの『カレヴァラ』とサルメライネンの昔話集『フィンランド国民の昔話と伝説』のような記念碑的な仕事が見れたが、学問的には注目すべき研究には至らなかった。カレヴァラをめぐる活発な議論は、逆説的ながら研究にブレーキをかけ、研究を促進するものとはならなかった。というのは、当時の学者たちは、カレヴァラについて、叙事詩と口承の民謡とのあいだの関係について明確な理解を持っておらず、またロンルートが編者としてカレヴァラにどれほど関与していたかについても明確な理解を持っていなかったからである。例えば、十九世紀中頃の著名な古典語研究者であり、フィンランド語の最初の教授であり、また、ウラル学の創始者である

M・A・カストレンの民俗学的主著については、次のように一般的に批判されている。——これはロンドンの頭の中の神話的世界にすぎず、フィンランドの民間信仰の世界を提示しているわけではない。しかも、カストレンはその詳論において、カレヴァラに基づいて論をすすめており、採集された伝承には基づいていないのである。また、それ以後の多くの研究者についても言える本質的な欠陥は、歌謡、呪文、昔話、伝説、民間信仰に登場する超越的存在（例えば、妖精、こびと、魔女など）をすべて同等に扱っていることである。

フィンランドにおける民俗学の成立時期は一八七〇年代の前半にあたる。決定的だったのは、ユリウス・クローンの「民間文芸の研究においては、カレヴァラを拠り所にするのではなくて、本来の〔口承による〕歌謡の記録に基づかなければならない」という確認であった。歌謡が各地を転々として移動するものであるということは、既にほかの学者たちも気づいていたが、歴史地理的方法論の最初の発展的な枠組みはユリウス・クローンによって立てられたわけである。

研究史的な分析をする際には、その前提として、ジャンルの変遷史を考慮に入れなければならない。それには二つの次元がある。

——一方では、研究者たちのあいだで、口承文芸のジャンルに対する見解が分かれており、いつも新しいジャンルが考えられている。他方では、ジャンルそれ自身もそれぞれ異なる時代に生まれ、また、時代によって、民間伝承の内部において異なる位置を占めている。

研究者たちのジャンル変遷史では、あるジャンル、またはいく

かのジャンルが優先的に研究されることがある。その理由は個々の国によって異なる。しかも研究者たちにとっても、時折、どのジャンルを優先的に扱うべきかをみきわめることは困難である。

フィンランドの民間文芸において強く優先されるジャンル群は、例えば、詩形のカレヴァラの文学（特に、叙事詩、叙情詩、婚礼の歌、呪文）である。このカレヴァラ文学はそれほど国際的ではないし、例えば、昔話ほど容易には理解されない。それにもかかわらず、カレヴァラ文学は昔話と比べて、文化史的にも、また研究方法論的にも、はるかに大きな意味を持っている。詩形のカレヴァラの民間文芸は十六世紀に既にみられ、早い時期から、例えば諺がこれに加わった。個々のジャンルの機能や歴史的証言力についての理解が不正確であったり、ゆれ動いていたにもかかわらず、詩形のカレヴァラ文学は、数世紀が経過するうちに、「さまざまなジャンルに」分化していき、研究者の頭の中では、しだいに聖者伝風歌謡や呪文や「神聖なる」熊についての歌謡に関心が移っていった。謎と寓話はフィンランドにおいてはほぼ同時に発見された。伝説に関してはドイツやスカンジナビア諸国に比べてフィンランドでは、明らかに遅れてその存在が確認された。また、例えば、嘆きの歌謡のように、一時期に発見されながら、再び忘れられたジャンルも存在する。

この発見と忘却は、民間伝承の中の現実のジャンルの盛衰そのものと対応しているわけではない。研究者たちがしばしば特殊なことで、例えば古い文化や異文化の代表的ジャンルに目を向けてしまっている、たえず存在するジャンルが研究者の目にとまらないこともあり

うる。歴史的に見れば、ジャンルというものは普遍的でも永遠なものでもない。ある地域において、ある決ったジャンルが発生し、よく知られるようになり、おそらくは支配的なジャンルになり、その後再び、まったく機能が衰えて、最後には、すっかり消滅してしまうこともある。この観点から見れば、昔話がフィンランドで発見されたのは、比較的遅く、つまり、十九世紀の終わり頃であった。その一方、伝説ザイの決定的な発見が一九三〇年代にずれ込んだということとは、決して致命的に不利なこととはいえないだろう。

優先されたジャンル、または支配的なジャンルの衰退が新しいジャンルの発見の「手助け」になることもある。伝統的な昔話の語りが衰退したとすると、歌謡の豊富なカレヴァラ地方には不便で入りにくいことは、詩形のカレヴァラ文学が消滅したと無関係ではない。一九一七年にフィンランドが独立してのち、新しい状況と条件が生まれ、伝説と、そればかりでなく、思おもい出話、年代記などの個人的な話が大規模に収集され、また研究されるようになった。

今日、我々は再び新しい状況のもとにいる。——一九三〇年代にまだ生きていた信仰伝説、由来譚、歴史伝説は大部分消滅した。そして我々は今日、自伝的な思おもい出話、日常的な語り「世間話」の時代に生きている。これらのジャンルの分類法はまだ確立されていない。第二の本質的な変化は、さまざまなメディアを通して伝達される民俗資料が強調されることによって起こってきた。もっぱら口承によるジャンルは、確かに存在し、かなり広範囲に拡がっている（例えば、政治や性を話題にしたきわどい内容の逸話や小咄）にもかかわらず、全般的には衰退している。この変化は民俗学者たちが

研究を通して認識しているよりも、実際にははるかに強烈なものである。というのは、古い伝承資料が残っているごくわずかの地域における野外調査と資料館の資料に基づく研究は「強烈な変化のみられる伝承の実体」の全体像を弱める役割を果しているからである。

二 北欧の動物昔話の歴史

もし、カール・クローンが学位論文を詩形のカレヴァラ叙事文学について書いて、昔話について書かなかったとしたら、「フィンランドの方法論」〔地理・歴史的方法論〕は、おそらく、国際的な民俗学の分野に取り入れられなかったであろう。言うまでもなく、カレヴァラ叙事詩に関する国際的な研究は存在しない。——カレヴァラについては、なるほど論議はされたが、それは部分的なもので、しっかりした論拠には至らなかった。クローンは、熊（狼）と狐、並びに——その比較のため——ライオンとジャッカルに関する昔話を、つまり強い動物に勝つ賢い動物に関する昔話（アールネリトンプソン昔話番号AT 1—21, 36, 37, 43, 47A, 50）をテーマとして選ぶことによって、非常によく知られたヨーロッパの伝統的研究につながった。その際、決定的な役割を果たしたのは、この学位論文が同時に——研究史的な部分は要約されたが——ドイツ語に翻訳されたことである。

クローンはその長い序文において昔話研究の論争点について明確な態度を表明した。——「昔話は古代インド・ゲルマン語族にその基層がある」というグリム兄弟の説を否定した。というのは、言語

ではなく文化がその伝承保存に重要な役割を果たすからである。例えば、フィンランドにおいて出会う動物昔話は二つの主要話型——西方系と東方系に分けられる。西方系はスカンジナビア伝承文化圏に属し、東方系はロシア伝承文化圏に属している。

クローンはまたタイラーとラングの人類学説も否定した。——同じ内容を持つ昔話がさまざまな独立した地域で平行して偶然に成立するものであるという主張は、まちがった関連づけ（つまり、完全に一致しないものを同じものとみなしている）に基づいているので、その場合に必ずしも同じ昔話の類話が議論の対象にならないわけである。明らかに同じ昔話とみなされる場合は必ず、その昔話が伝播してきたということが証明されると、クローンは主張する。

昔話の口承伝播が希薄な中央ヨーロッパにおいては、書承の資料が大きな意味を持っている。一方、スカンジナビア諸国やバルト海沿岸地域では、昔話の口承による伝播の方が一般的に見られる。つまり、口承の昔話は、中央ヨーロッパのように孤立した「伝承の」最古層まで沈澱したものではないわけである。

クローンは、ベンファイの昔話インド起源説に対しては——たとえ、ベンファイが口承伝播を過少評価しているとしても——一定の肯定的態度を示している。クローン自身は、昔話に登場する諸要素の起源と伝播経路を綿密に研究することが、成果の得られる唯一の研究法であると考えている。この研究法なしでは、いくら一般化しても、砂上の楼閣だと主張している。クローンによれば、昔話は、歴史的にも（グリム）、発達史的にも（ハーン）、寓意的にも（ド

ウ・グベルナティス）、隠喩的にも（マックス・ミュラー）、神話と結びつけて考えるべきでないし、また伝説から派生してきたものだと考えられないと、主張する。クローンが基礎資料としてフィンランドの昔話を選んだことは、次のような長所を持っている。——形式の豊かさ、古さ、叙事詩との関連性である。

クローンは、自分の研究対象にした「フィンランドの」昔話の年齢についてこう立証している。——これらの昔話は、ヴェルム地方の森林フィン族のあいだに登場しているので、少なくとも十七世紀にはさかのぼることができる。というのは、森林フィン族の先祖は当時サヴォから来て、スウェーデンとノルウェーの国境沿いに定住したのだから。クローンはまた語り方について、こう伝えている。

——これらの昔話は通例独立した三つのつながりをもった話として語られる。スカンジナビアの動物昔話は、インド・ギリシア・アフリカの類話とは発生的にはなんら関連性を持っていない。というのは、インド・ギリシア・アフリカ系の昔話は独立した南方の動物昔話圏を形成しており、寓話文学（例えば、イソップ寓話）や中世の動物叙事詩（例えば、ライネケ狐）の成立に寄与したのである。一方、スカンジナビアの動物昔話には「南方の動物昔話に登場するような」主従関係や第三者（草食動物）の愚かさを利用するモチーフは登場しないし、結末に教訓も付いていない。クローンによれば、この北欧の動物昔話は少なくとも千年の歴史を持っており、既にヴァラング人（九世紀にロシアに入ってルーリック王朝を建てたノルマン人）とともにロシアに伝播したという。そして、もし、この北欧の昔話が後になって南方の動物昔話と接触していたなら、伝

承が衰えていたにもかかわらず、南方から影響を受けるよりも、南方の方により多くの影響を及ぼしたであろう、とクローンは言っている。ちなみに、クローンの論敵、E・アスベリンの意見によると、ロシアの伝承は西ヨーロッパに由来するものであり、従って、クローンの主張するところよりも伝承としてはかなり新しいものであるという。

クローンの説で特に興味深いのは、クローンが北方の昔話圏と南方の昔話圏という、それぞれ別個の伝播圏を仮定していることである。クローンはさらにこう推測している。——もし、フィンランドの動物昔話が東方の（すなわちカレリア地方の）歌謡の豊富な地域にまで到達していたなら（実際にはそこに伝播しなかったが）、それはきつと民間の動物叙事詩に発展していただろうと言う。同様に、「カレヴァラの主要人物」ヴァイナモイネンに関する歌謡から、白海カレリア地方において、一種の叙事詩が生まれていたであろうと言う。このクローンの推測は、まさに進化論的、伝承生態学的な主張であり、図式的に適応される歴史地理的方法論ではとうてい及ばないものである。

三 地理Ⅱ 歴史的方法論と昔話研究

地理Ⅱ 歴史的方法論は一八七〇年から一八八〇年代にかけて、ユリウス・クローンと「その息子」カールレ・クローンによって確立された。後になって、スカンジナビア、エストニア、アメリカの研究者たちもこの研究に加わった。そして、この方法論は民俗学の分

野において一般的に用いられるようになった。この研究法の定義に關しては、K・クローンとならんで、特にA・アールネ、W・アンダーソンがよく知られている。フィンランドにおける、この方法論のその後の発展については、M・クーシイの名を挙げなければならない。この方法論がいつまでも新鮮なものであることは、一九七一年にクローンの著作が英語に翻訳されていることからみても、明らかであろう。

この方法論は、ある決まった伝承文芸の原形、發生地、發生時期、「横の」伝播経路、「縦の」伝承系統、類話間の相互關係を探索することに限定されている。この方法論の最も重要な存在理由は、伝承文芸の可変性の中に求められる。従って、研究者は、伝播地域全体から、できるだけ多くの類話を集めなければならない。全く充分な資料が収集できる場合は極めてまれである。従って、ある伝承文芸の發展史の再現は、研究者の理論的枠組（パラダイム）によって左右されることになる。

外的には調和のとれた方法論にみえるが、その方法論の内部においては、緊張が生じている。というのは、この方法論の創始者である、ユリウス・クローンとカールレ・クローンのあいだでもう既に、見解の相違が認められるからである。ユリウス・クローンは、進化の方向で理論的枠組を考えている。——その見解によれば、民間文芸や昔話は、その伝播の過程において比較的単純な核になる話から、話が拡張されて、さまざまな話に發展するという。従って、最も完全な、立体的な話はかなり後に成立したものだと言えるわけである。これに対して、カールレ・クローンは退化の立場を取ってい

る。——ある歌謡または昔話は、それが初めて現れたとき、その全盛期にある。そしてその原形からその展開は退化の方向に向かうと言う。後の研究者たちも二つの理論的枠組みに分かれている——例えば、M・ハーヴィオは退化の立場をとり、M・クーシイは、その理論的体系が「クローンの体系とは」変化しているとしても、やはり、進化の立場をとっている。

『民俗学連盟通信』(C. F. C.)の全巻を見渡してみるならば、この「地理Ⅱ歴史的」方法論が口承文芸の多くのジャンルに適用されていることが、わかるであろう。一九八三年までに出版された二三四号のうち、ほぼ六〇の個別研究書(昔話に関する研究書は二〇、民謡と物語詩の十一、伝説の六、笑い話の五、聖者伝の五、呪文の五、謎の五、遊戯の二、諺の二、身ぶりに関するの二)がこの方法論によって研究されている。また四十六の個別研究書には、この方法論の前提となる話型目録が含まれている。従って、『民俗学連盟通信』のうち、実に四十六パーセントが、地理Ⅱ歴史的研究方法の成果なのである。また、この方法論の原理は、民俗資料が個別研究的に選ばれていない研究(例えば、民間信仰や習俗に関する多くの研究がこれに当たる)にも適用されて、この双書の多数の巻に収められている。

明らかに、この方法論は、固定した形を持ったかなり複雑な口承文芸——例えば、長い昔話、韻律と詩節をもつ歌謡、決まり文句を含む謎や諺——の研究に最も良く適している。別の言葉で言うならば、口承文芸が単一発生し伝播するものであるという前提が成り立つためには、研究の対象になる口承文芸が、かなり複雑な、目印に

なる「各要素の」結合を備えていなければならない。なぜならば、その結合によって、口承文芸が互いに同一のものであることが認定されるわけだから。

カール・クローンは死の二、三年前に、昔話、聖者伝、伝説、神話に関する地理Ⅱ歴史的研究所の成果の『展望』において、一連の代表的な研究者たちと、その諸業績を収集した。クローンの後継者たちのあいだでは、この方法論を厳格に守る考え方はフィンランドにおいてはゆるんだ。絶対的な原形の時代は過ぎ去った。そして、話の中核になるものや、最も根源的な目印になる結合についての議論されるようになった。その結合といっても、それ自身まとまった論理的な全体性を持つていなければならない。また、同じ系統に属する類話に基づいて、抽象化された全体を記述する「標準形」について議論されるようになった。波状理論や自動的な伝播の理論は影をひそめ、しだいに入植史的、言語史的、文化史的、社会史的な推論が幅をきかせるようになった。この地理Ⅱ歴史的な方法論は部分的には、M・ハーヴィオのモテーフ史的研究やM・クーシイの様式的研究によって新しい方向に変化・発展した。地理Ⅱ歴史的な方法と呼ばれる、フィンランドの研究者のペンになる(「カール・クローン」)広範な個別研究書が現れて以来、「この時点で」既に四半世紀が経過した。

四 地理Ⅱ歴史的な方法論に対する批判

地理Ⅱ歴史的な方法論は、その研究方法に関する本が出版されると、

すぐに、外国でもフィンランドでも批判された。カールレ・クロー
ンは「地理Ⅱ歴史的研究の」『展望』という著書において、特に外
国の研究者たちの批判に対して、とりわけ、フォン・シュドウ、ヴ
ェッセルスキー、ベディエの批判に対してそれぞれ態度を表明し
た。——クローンは、フォン・シュドウ（さらに、さかのほればグ
リム）の唱える、魔法昔話のインド・ゲルマンの性格の継承論、並
びに、言語的に直系の継承を「生態型」とみなす理論を否定した。

また、ヴェッセルスキーの唱える、民間文芸の原形を書承資料に求
める見解を一面的だと批判した。一方、アンダーソンが書承の類話
を有効に利用している点を指摘し、評価している。また、クローン
は、ベディエの理論を不可知論的だと批判している。というのは、
ベディエは、あらゆる類話には「元にもどされない形」が存在す
るという立場から、類話の可変性の意味を否定しているからであ
り、また、クローンによれば、ベディエは発生的に互いに関係のな
い口承文芸をテーマに従って分類しているからである。

クローンは、ロシアの研究者たちの批判については知らなかった
ように思える。その最も興味深いコメントは昔話の型の不変性に関
するものである。V・プロップは、アールネの扱った次元では、少
なくとも、明確な話型分類はできないと、主張している。特に魔法
昔話の話のすじは互いに類似しているので、ある昔話の諸要素がほ
かの昔話に移行することがありうる。もし具体的なテキストが五つ
の昔話の型の諸要素を含んでおり、しかも五つの昔話の結合したも
のでないならば、話型目録を適用することは、非常に困難であらう。
テキストを話型によって分類することは、近似的なものであり、例

えば、二人の研究者が同じ分類をするとは限らないであらう。他方、
プロップは、構造的に同一の昔話が、異なる話型に入れられること
は、しばしば起こりうると、考えている。

また、A・I・ニキフォロフは、W・アンダーソンの笑い話研究
の批判において、研究対象を限定することの困難さについて指摘し
ている。そしてニキフォロフは、自分がある小さな地域で集めた
『竜退治』型の昔話(At300)の十五の類話が、それぞれ互いに異
なっており、十一のほかの話型と関係があることを確認した。そこ
から、ニキフォロフは次のように結論づけている。——昔話の語り
手たちは一定のいくつかの基本的な要素を自分のものにしており、
昔話を語る際にいつもそれらの要素を新しく組み合わせ、新しい昔
話を紡ぎ出していくのであらう。

不変的な話型の存在が実証されない場合には、昔話の移動に関
する理解は少なくとも細かい点においてはかなりちがってくること
は疑う余地もない。他方、地理Ⅱ歴史的方法による個別研究書に述
べられている、昔話の伝播状況に関する主張は、かなり概括的で、
巨視的に見られているので、郷土史や郷土地理を強調するロシアの
批判とは、ちがった次元において論じられているわけである。「フィ
ンランド学派」の、生きた伝承に関する理解がたとえどんなに図式
的で、機械的であるとしても、個々の昔話についてこの学派が説明
するよりも、もっと明確に、昔話の伝承の世界的伝播状況を説明で
きる、資料に基づく研究は、今のところ存在していない。

アールネ・イトンプソンの話型目録は、決して学問的なものではな
く、実際のな「研究の」補助手段であり、より良い手段がほかにな

いので、今後もたえず使われていくであろう。この目録の中で、ある決まった話型の中に数え上げられている類話が、実際に発生的に、互いに、関係があるのかどうかは、まったく明らかではない。仮にもしうだとしても、どうしてそうなのかは、明らかにできない。重要な資料がほかの話型の中に組み入れられている場合も大いにありうるだろう。この問題は研究対象の学問的な定義との関連の中で初めて明らかにされるものである。すなわち、研究されるべき「話型」が、研究者によって、そのつど自分で——伝承の実態と研究課題のねらいを顧慮しつつ——定義され、限定されなければならないのである。この観点から見ると、学問的に使用に耐える完成した話型というものは存在しないと、言わざるをえないであろう。

ロシアの研究者の考えによると、地理Ⅱ歴史的方法論は、昔話を初めとする口承文芸の流動性、芸術的形式、伝承ジャンルの歴史的發展、多地域での発生の可能性、さまざまな文化間や口承伝承社会間の相違、ヨーロッパやインドやイスラム世界以外の地域を、充分に考慮の対象にしてこなかった、と言う。昔話研究において、地理Ⅱ歴史的方法論の確立者たちによって設定された課題をさらに拡張していくことは、もちろん可能だし、また必要なことでもあろう。それは、もちろん研究を通してなされるが、もっと根本的なことは、ニキフォロフの次のような主張である。——アーダーソンの研究『皇帝と修道院長』における伝承の「系統樹」^{システム・ツーム}は、生きている伝承を発生史的にあとづける根拠としてはふさわしくない「類型論」^{タイプ・ロジック}以外の何ものでもない。研究対象（例えば昔話の型）の恒常性とな

らんで、まさに類話間（また伝承の系統間）の相互依存関係が、第二の根本課題を提示する。この課題は、例えば、ハンガリーのG・オルトゥタイの考えによると、地理Ⅱ歴史的方法論ではあまりにも直線的、機械的に解かれるきらいがあるという。オルトゥタイは、^{*}ひな型と（新しい）類話の関係の問題を論究した。そして、同じ話型と同じ構造が相互に牽引しあう作用を持つており、またその親和作用のおかげで、新しい話型と形式が生じるのではないかと述べている。

E・N・セテラ、V・サルミネン、A・R・ニエミは、フィンランドにおいて一九二〇年代から、地理Ⅱ歴史的方法論の主たる批判者であった。——セテラによると、この方法論はあまりにも地理的であって、それほど歴史的不是な言い方。すなわち、もし、伝承が父から息子に伝わるが、場所は変わらない場合、この方法論は縦の変化を考慮に入れていないことになる。また、この方法論が、ある歌謡や昔話の個々の詩節やモティーフのみを比較して、移民や個人の移住者によって引き起こされる（突発的な）移動——従って、波状的分布や均等な分布を示さない移動——を見逃すならば、その歌謡や昔話の全体像をとらえていないことになる。V・サルミネンは、最後に挙げた批判を支持して、次のような論拠を挙げている。——さまざまな世代の人たちが移住した典型的な地域であるインゲルマン地方では、歌謡の伝承の変化は、地理的な分布によって説明されず、むしろ、縦の家系伝承によって明らかにされると言う。

セテラは、いわば、新しい研究法、類型学的な研究法を展開し

た。セテラの方法論によると、歌謡の資料は、採取地によって分類されるのではなく、その資料に見られる一致点「歌謡類型」に従ってグループに分けられるという。すなわち、資料の相互の関係を詳しく調べると、むしろ地理的に離れた所での一致と地理的に近い所での相違が考慮されなければならないという。この分析から、歌謡類型の「家系による定型」が明らかにされる。これで分かるように、その際、問題になっているのは、何ら新しい理論的枠組みではなく、地理Ⅱ歴史的方法論による「類型」と同種のものである。また、クローンとセテラの対立は、詩形のカレヴァラ文学の由来に関する全く異なる解釈の中に最も顕著に現れている。——クローンは、「カレヴァラ文学の中に」せいぜい、中世にさかのぼるキリスト教起源の諸要素と、「中世の」物語に由来する英雄的人物を見たのに対し、セテラは異教の時代に由来する神話的モチーフと、自然の寓意から生じた虚構の英雄を見たのである。

また、ニエミは、歌謡や昔話の変化の背後にある諸要素の多様性を強調している。——縦の伝承と横の伝承、歌い方の世代による相違、一定の地域の伝承における競合する類型の共存（その際、最も人気のあるものが、一番古い形であるとは限らない）。ニエミも、「型」について論じるが、セテラとは少し異なる意味に用いている。それは、特定の地域や特定の時代に採取された歌謡資料全体を統一あるいくつかの定型にあてはめることによって可能となる口承文芸の一種の「生態型」〔伝承の生態の中にみられる地方的原形・時代的原形〕を意味している。その定型を知覚することによって、研究者たちは、後期に属する要素か、あるいは異種の要素かな

どを認識し、区別することができるので、この「定型」は、研究の重要な補助手段となるのである。ニエミの批判は、元来、セテラの批判よりも鋭いものである。というのはこの批評には二者択一的な研究法が含まれているからである。

カールレ・クローンの講座〔ヘルシンキ大学フィンランドおよび比較民俗学講座〕の後任教授たち、A・R・ニエミ（一九三〇——三一年、教授在任）、V・サルミネン（一九三三——四六年、教授在任）は、方法論の発展の点からみても、国際的な交流の点からみても、クローンの学問的水準には達しなかった。クローン以後の後退が目立った。これは、特に昔話研究にも当てはまる。従って、マルッティ・ハーヴィオの学位論文『連鎖昔話研究』（AT1696）と、その続編『連鎖昔話研究』（AT2021）が出版されたときは、いささか驚きを持って迎えられた。この研究は、フィンランドにおける最後の内容のある昔話研究であった。その後、研究の関心は、民間信仰と神話に移って行った。そして、トゥルク〔大学〕の宗教学者、ウノ・ハルヴァが、カールレ・クローンの死後、『民俗学連鎖通信』（FEÖ）双書の編集を引き受けた。

五 フィンランドにおける

口承文芸研究の新しい傾向

第二次大戦以後ようやく、フィンランドの民俗学は、従来の理論的枠組みを転換するような、めざましい発展を遂げた。地理Ⅱ歴史的方法はなるほど、その後も生き続けたが、だんだん研究に適用されることが少なくなり、民俗学にとってもはや避けられない問題で

はなくなった。J・ハウタラの、広範な学問史的研究（一九五四年）は、発表の時期から考えて、ポスト・クローンの世代の最後の研究であった。同様にその世代に属する研究者は、マルッティ・ハーヴィオ（一九四九—五六年、教授在任）、マッティ・クーシイ（一九五九—七七年、教授在任）、ヨウコ・ハウタラであった。

この三人は、クローンの研究法とその批判の雰囲気の中で育った。そして、共通の中心的な研究資料——詩形のカレヴァラの中の叙事詩的歌謡——を持っていた。この学者たちのいづれもがクローンの研究の伝統から離れることなく、その伝統を更新しようと努めた。

ヨウコ・ハウタラは、一九四〇年代に、二つの民謡研究と一つの理論的論文を刊行した。ハウタラはその論文の中で、原形に近づく可能性を否定し、次のような「コラージュ」[「さまざまな断片の組み合わせ」]の考えを明らかにした。——新しい歌謡というものは、既に以前からさまざまな歌謡の中に存在する詩句や詩節を組み合わせることによって創造されるものである[従って、もともと原形なるものは存在しないことになる]。ハウタラもクーシイもセテラの方法論をさらに発展させたのだと主張している。だが、それは、地理Ⅱ歴史的方法論の基本線から極端に離れてしまったというわけではない。このように原形という考えが相対化されたにもかかわらず、口承伝承の系統樹は依然として保存されていた。特に、注目に値するのは、この二人の研究者のいづれもが、その方法論を散文伝承に適用しなかったことである。

マッティ・クーシイの興味は諺にもあった。諺研究の著作のほか、クーシイは国際的な諺の分類体系をつくる提案を行った。ま

た、クーシイは、ある聖者伝風歌謡の模範的な分析の枠組みの中で、地理Ⅱ歴史的方法論の可能性について、自己の態度を明らかにした。——一方では、クーシイは、様式、構造、決まり文句、慣用句の分析のほかに、内容、ジャンル、機能の分析を取り入れることによって、この方法論を近代化しようとした。他方、クーシイは、次のように主張した——この方法論は、その基本的な性格からみて、原典批評学的である。ここにおいて、「方法論の歴史の」輪が閉じることになる。なぜなら、これに対応する主張が、既に一九〇一年にエストニア人のオスカル・コラスによってなされているからである。しかしながら、民間文芸の口頭伝承による変形[「さまざまな類話」]を、書承テキストの書写による変形[「さまざまな稿本」]と同等に扱うことは、民間文芸の生態と変化についての最近の見解とは大いに矛盾するものであろう。

マルッティ・ハーヴィオは、クローンの方法論を連鎖昔話のほかに伝説にも適用した。しかしながら、この方法論の限界と目的が、あまりにも狭すぎるということが明らかになった。そこで、ハーヴィオはモティーフ史的な研究法に移行した。この方法によって、ハーヴィオは、ある決まった口承文芸——例えば、歌謡、伝説、物語詩など——が含んでいる諸要素の背景を明らかにしようとした。こうしてハーヴィオは文化と時代の限界を乗り越えたわけである。歌謡とそのモティーフの背景のあいだの歴史的Ⅱ発生的結合は、しばしば非常に弱いので、その比較はさしあたりは現象学的なものになるであらう。ハーヴィオにとって、研究とは特に、ある口承文芸——例えば歌謡——の仮説上の創作者を、ある特定の文化時期や文

化環境や文化状況のもとで明らかにすることであった。また、研究とは、その歌謡の出所を明らかにし、そのうえ、なお、その歌謡の「意図するもの」と「訴えるもの」を明るみに出すことであった。ハーヴィオオにとってそのような研究に成功したのは、司教ヘンリックの殺害に関する聖者伝風歌謡、ヴァイナモイネンの叙事詩、それにいくらかの物語詩のモティーフのヨーロッパの背景を解明する研究においてであった。伝承文芸——例えば、ある伝説——は、ハーヴィオオにとって実にしばしば、その伝説の背後にある信仰や習慣や世界像に近づくことのできる道となった。そういう意味で、ハーヴィオオはまた宗教学者としても注目すべき存在であった。

口承文芸研究の分野で、フィンランドの「家の精」^{ヘウスガイスト}に関するハーヴィオオの研究（一九四二年）は画期的なものであった。研究の重点は、信仰伝説に置かれていたにもかかわらず、ここにおいて、初めて、超自然的な体験とそれについての思い出話^{エムネ}に対して、伝承心理学的な視野が広がった。この研究と、その二十年後に現れたインゲルマン地方における「屋敷霊」^{ゲボイテガイスト}に関するラウリ・ホンコの研究には、科学史家の意見によると、明らかに方法論的に新しい方向が認められるという。ホンコは、知覚心理学、役割理論、機能分析、ジャンル分析などの方法を用いた。そして、ホンコは、あらゆる類話を、それらが結局は帰っていくべき伝承の生きている状況の場という立場から、厳密に分析したが、調査された地域以外の、それと対応する伝承との比較はなされていない。その研究の結果として、精霊信仰の諸要素が意義深い行動の全体性の各部分として働く環境の姿が明らかにされた。また人間ばかりではなく、超自然的存在の行

動をも規定する価値、規準、役割というものが明らかになった。

民俗学上、重要な資料価値を持つているのは、超自然的な体験についての報告である「思い出話」^{エムネ}である。思い出話は、うまく行けば、超自然的な伝承を現実化させた状況の再構成と分析を可能とするであろう。「超自然的な」体験それ自身は、知覚の過程とみなされる。すなわち、個人の「不可思議なものを」認識しようとする心構えと「不可思議な対象から何らかの」手がかりを得ようとする欲求に支えられて、伝承の思考・認識パターンが人間の知覚領域へ投げ込まれ、客体化される、知覚の過程とみなされるのである。一方思い出話は、体験された「不可思議な」ものを描写し、解釈し、理解しようとする試みである。こういう観点からみるなら、思い出話は、一定の型にはめられた信仰伝説^{トラステンザゲ}よりも、生きた民間信仰にはるか近いのである。というのは、信仰伝説は、出来事の報告ではなくて、超自然的な世界はどのように機能しているかを前もって教えてくれるお手本なのであるから。伝説も思い出話も、超自然的な体験に対する心の準備を与えてくれるものであるが、このように、そのやり方は異なったものである。

フィンランドにおける民俗学の支配的な理論的枠組み^{テオレティ}の変化は一九六〇年代に起きた。一九六三年に、詩形のカレヴァラ文学とその研究成果に関するマッティ・クーシイの著作が出版された。それによると、従来支配的だった研究分野は、すっかり鳴りをひそめている。研究の関心は民間信仰、神話、儀礼、嘆きの歌謡^{グリーデル}、諺、謎に向けられた。言語学、宗教学、社会学の影響のもとに、新しい課題と研究法が生まれた。新しい研究分野である宗教学は、初めにトゥル

ク大学に、その後ヘルシンキ大学に、独立の講座が設置された。そして、宗教学を代表する学者たちは、初めは、その近接領域で学問的訓練を受けた民俗学者たちであった。その結果、宗教学と民俗学のあいだには密接な関係が生じた。O・レーティプロの言うところに従うと、ヘルシンキ大学の民俗学の新しい傾向は、言語学的・構造主義的であり、トゥルク大学の民俗学の新しい傾向は文化人類学的である。しかしながら、一九六〇年代の終りには、両者は共通の特色を持つに至った。それは、特に、フィールド・ワークやジャンル分析に対する関心である。

こういう関心の変化は、さまざまな点に現れた。——資料館で仕事をするのではなく、地方に出かけて行き、もはや人間の心情だけを研究するのではなく、生きた伝承者とその伝承社会におもむいた。比較するのではなく、地域の中で研究し、テキストの代わりにコンテキスト(テキストの背景としてばかりでなく、それ自身、独立した状況の文脈)を考察した。叙事詩的文学の代わりに儀礼的な文学(例えば、嘆きの歌、婚礼の歌、呪文)を研究した。機能、構造、ジャンルの分析のほかに、量的な方法論、レパートリー分析、情報伝達理論のモデルを適用した。また、研究者たちは、しばしば、パフォーマンズ「伝承の実演の場」、伝承を生み出す際のルール、伝承の生態学などについて議論した。「従来の研究との」連続と和解を求めて、新しい傾向に、ある種の補足的なものを見ようとした研究者たちもいくらかいたが、一度生じたこの変化は、おおうべくもなかった。

最近の口承文芸研究における興味ある研究テーマは、ジャンルの

問題、一定の物語の種類、語り手論、個人と伝承社会のレパートリー、口承文芸の構造分析、伝承者と収集活動の状況である。ジャンル理論においては、理念上のジャンルと現実のジャンルを区別しようと試みた。また、ジャンルを形成する際の基準やジャンル相互間の関係を研究することによって、ジャンル概念の分析を進展させた。さらに、通常のジャンルに属する伝承テキストだけでなく、そのテキストを包含する語りの場と動作の全過程を研究対象に組み入れることによって、研究領域を拡大しようとした。また、物語るジャンルのうちで、興味の対象は、神話、思い出話、伝説から、ジョーク、笑い話、年代記、個人的な話一般(例えば、夢の話、噂話)にまで及んだ。

語り手の類型論は、一定の村や教区や語りの機会などに基づいて、その輪郭が描かれた。レパートリーに関しては、例えば、子供たちの遊び仲間のレパートリーや、個々の子供のレパートリーが研究された。この種の研究においては、経験的に集められた資料に基づいて、社会心理学的な諸条件——個人のパーソナリティー、学習過程、そのつどの環境など——が、レパートリーや伝えたい伝承の選択にどのような影響を与えるかが、明らかにされた。また、ある語り手の生活史・語り手の社会的背景、語り手の伝承を収集する過程などに関する研究も現れた。また暗示的な語りにも目を向けられ、その語りの意味の成り立ちについて議論され始めた。状況と語り手に関する意味とならんで、ある物語の構造と意味の結びつきを研究することも、可能であろう。さらに、ジャンルの機能的概念を構造と結びつけて考えることも、一つの可能性であり、既に試みられて

いる。

「もし、包括的な理論形成のための諸要素を見つけようとするなら、二つの立場がありうる。その一つは、ジャンルに特有な情報伝達理論であり、もう一つは、伝承の生態学である。今まで述べてきたさまざまな研究——それが、個人またはグループに関するものであれ、レバートリー、構造、意味に関するものであれ——たいいていの研究に共通する点は、伝承ジャンルとして扱われている資料に、結論が連結していることである。これは、いわば、民俗学上の情報伝達理論のための予備的研究であり、この理論は一般的な「談話」〔文より上位のあらゆる発話〕研究につながっていくものである。その際、研究者の目は、ある時は、物語る個人に向けられ、ある時は、伝承テキストに向けられるのである。

伝承の生態学は、コンテクストを重視し、伝承の変化の過程を、体系的なもの、また文化構造によって規制されるものと考え。そして、この文化構造もまた、部分的には社会的・経済的・物理的環境の諸要因によって決定されるのである。ある定義によると、伝承生態学は、「ある決まった環境の、ある決まった伝承者たちのあいだで、あるいは、大、小の伝承地域の、ある決まった社会的グループのあいだで、伝承が、どのようにして入ってきて、学びとられ、適合され、作られ、用いられ、変えられるか、また、どんな分布と連続性を持っているか、また、どのように伝承が発展し、最後には消えていくか、を研究する」(L・ホンコ)ものである。マッティ・サルメラは、統計学的方法論を適用して、伝承を巨視的に見て、生態学的分析を行なった。——例えば、精霊信仰に関する表象

や伝説が、できるだけ広大な発展史的・社会的背景の中で考察されている。ラウリ・ホンコは、伝承が地域、グループ、社会のさまざまな特徴と同一化される問題を取り上げて、論を展開し、その結果、伝承が語りの場にどのように順応するか、その仕方をいくらかの形態に分類して、考察した。伝承の状況や過程を、徹視的に見て、生態学的に分析する場合、その研究は、伝承の発生、伝達、意味、機能のさまざまな問題に接近していくことになる。

六 フィンランドにおける今日の昔話研究

一九三〇年代以後、フィンランドの昔話研究は、かなり長い間、静止状態にあった。ラウリ・シモンズリーやマルッティ・ハーヴィオたちはさまざまな関連においてしばしば、昔話に立ち帰ったにもかかわらず、あるまとまった時期の昔話研究の最後の成果は、残念ながら、ラウリ・シモンズリーの笑い話の研究『霜よ、部屋に入ってきて』ひとつぐらいである。その後の世代の研究者たちのなかで、昔話研究に従事したのは、ビルッコリーサ・ラウスマーぐらいである。ラウスマーの論文は残念ながら翻訳されていない。——そのひとつは、詩形のカレヴァラの中の歌謡『花嫁獲得のための力試し』の昔話化(AT531+AT300+AT513混交型)と散文形式への稀な移行について考察されている。ラウスマーのもうひとつの論文は、昔話『物言う馬の頭』(AT533)とこの昔話に入っている歌に関するものである。後者の論文では次のことが確認された。——ある昔話が、詩形のカレヴァラの歌謡に移行することは、例証の比

較によって、かなり一般的な現象であることがわかった。カレリア地方においては、歌謡を歌うことの方が、昔話を語ることよりもはるかに重んじられているので、いくらかの昔話が、ほかの伝承ジャンル、すなわち叙事的歌謡に同化していく現象が起きるわけである。

新しい世代は、前の世代と、次の二つの点で区別される。——第一に、膨大な資料を集めて国際的に比較するかわりに、むしろ、ある特定の文化圏の資料をより正確に考察した。その際にも、昔話とはかの伝承ジャンルとの関係が考慮に入れられた。第二に、構造図式[↓]に関心が持たれた。同時に、昔話の機能と昔話の語り手の人柄が解釈の対象となった。特記すべき研究は、フィンランドの類話を資料にして、二つの昔話、『動物の義兄弟』(AT552A)と『婦人のお気に入り』(AT580)の関係について分析したヘイッキ・パウノンの研究である。——これは、プロップの構造図式のフィンランドでの最初の適用例である。この研究では、原型を捜し求めることなしに(せいぜい、ある種の理念型^{イデオタイプ}について論ずることはできようが)、類話の分析がなされている。得られた結果をテストするために、外国の資料が引き合いに出されている。その際に、外国の昔話資料の不確かな点は、フィンランドの資料館の資料と比較して、確認されなければならない。上述の二つの昔話はほとんど同一の昔話であるにもかかわらず、同じ地域にそれぞれ別々に伝承されているということは、両者の社会的機能が相違しているということから、充分に説明される。——一方はエロチックな色彩が濃い、他方はそうではない。それに対応して、語られる場も違うわけである。

新しい問題を探るには、しばしば、対象に対して密接な距離をも

って観察する必要がある。しかし、消滅しつつある伝承ジャンルを調査する際には、それはなかなか困難となる。白海沿岸のカレリア地方からの移住者、マリナ・タカロとの長年にわたる面接調査によって、次のような興味ある結果が得られた。——七年にわたる調査のあいだに、タカロの昔話のレパートリーは、新しい文化的環境にもかかわらず、六話から三十四話に増えた。そのうち、お得意のレパートリーは六話から十八話に増えた。ユハ・ペンティケイネンの分析によると、M・タカロの昔話は密接にその宗教的世界像と結びついている、という。ほかの伝承ジャンルにおいてと同様に、タカロの昔話の中では、同じ超越的存在と同じ運命信仰が強調されている。また、アクセル・オルリクの叙事的法則は、タカロの知っているほかの口承ジャンルにはあまり妥当しないが、まさに昔話には最もびつたり合致している。サトゥ・アポの分析によると、プロップの構造図式[↓]には限界があるという。——つまり、冒険の昔話にはそれが妥当するが、ほかの場合にはあまり当てはまらない。また、啓発されるところの多い点は、語り手が昔話を長く伸ばしたい時には長くできる、その技術の解明である。

サトゥ・アポはさまざまな構造モデルを批判的に比較し、独自の意味論的な構造分析を發展させようと、試みた。現在進行中の研究において、アポは、南西フィンランドの魔法昔話、二三五話を基礎資料にして、話のすじのタイプを解明し、さらに、民族誌、社会史、民間信仰の立場から魔法昔話の構造、変形^{変種}、内容を考察している。また、これらの資料を、フィンランドのほかの伝承地域の魔法昔話と比較し、さらに西ヨーロッパの昔話や書承の資料との関係につい

て論じている。意味論的な構造分析は、またベンティ・レイノによって、昔話に適用された。レイノが注目したのは、物語の構造と解積の結びつきであった。レイノは、ある聖書伝風昔話の分析を援用して、構造の把握が意味の理解に役立つのであって、その逆ではないと指摘し、次のように述べている「あるやり方で解釈できる物語は、申し分のない構造を持っている。だから、その物語の要素で、動機づけされていない要素はひとつもない」。明らかに、意味論的な構造分析は、ジャンルに特有な情報伝達理論と伝承生態学的観察のあいだの掛け橋として役立つであろう。

フィンランドにおいては、文字による伝承と口頭による伝承との関係については、あまり多くも、また組織的にも研究されていない。その理由の一部は、次の点にある。——フィンランド語の文字による伝承は、例えば、中央ヨーロッパ諸国と比べて、かなり遅くになって行なわれるようになったのであり、またそれもそんなに広範に行なわれたわけでもないからである。だから、フィンランド学派の方法論〔地理Ⅱ歴史的方法論〕は、文字による早い時期のわずかな類話よりも、口頭による遅い時期の類話を明らかに優先している。このような〔口承伝承〕偏重は、もちろん、例えばアールネにおいては決して絶対的なものではなかったが、「書承伝承を重んじた」ヴェッセルスキの考えに反するものであり、将来において、フィンランドにおいても、若干の修正を余儀無くされるであろう。特にこのような観点から、興味深いのは、現在行なれつつあるグン・ヘッラネンの研究である。ヘッラネンは、十九世紀に生きたフィンランド系スウェーデン人で、盲目だった昔話の語り手に関する

レパートリーについて考察している。この語り手のレパートリーの重要な部分は、図書館から借り出され、読んで聞かせてもらった多くの本にさかのぼることが明らかにされたのである。

訳者付記

本稿は一九八四年四月二十一日、来日中のラウリ・ホンコ氏（国際口承文芸学会会長）が、日本口承文藝學會主催の講演会（会場、國學院大学）にて行なわれた講演の草稿「Lauri Honko, Die Erzählforschung in Finnland: Gestern und Heute」を翻訳したものである。尚、当日は時間の関係で、その約三分の一は省略されたが、ここでは全編を訳出した。（ ）は著者の割注、また「」は訳者の割注である。

この講演は、いわば、内容上、密度の高い『ヨーロッパ口承文芸研究小史』になっている。というのも、この講演において、ホンコは、フィンランドで生まれた地理Ⅱ歴史的方法論の成立の事情から始め、現代の昔話研究の主流である構造主義的研究、伝承生態学的研究、意味論的研究にまで解き及んでいるからである。また、日本の昔話研究にとっても啓発されるところが多い。例えば、日本では現在、世間話が注目されているが、この講演では、超越的存在との出会いを語る口承ジャンルについても、伝統的なジャンル「伝説」と新しい口承ジャンル「思い出話」に分けて論じられており、日本の世間話との対比で大いに参考となるであろう。

尚、当日、通訳をされた小沢俊夫氏（国際口承文芸学会副会長、筑波大学教授）には、色々とご教示頂きましたので、ここに付記して、感謝申し上げます。（たけはら たけしげ・奈良教育大学）